

Title	定理証明によるファイアウォールサーバの検証
Author(s)	矢竹, 健朗
Citation	
Issue Date	2007-09-06
Type	Presentation
Text version	publ isher
URL	http://hdl.handle.net/10119/8255
Rights	
Description	北陸先端科学技術大学院大学 21世紀COEシンポジウム 「検証進化可能電子社会」 = JAIST 21st Century COE Symposium “ Verifiable and Evolvable e-Society ” , 開催：2007年9月6日～7日, 開催場所：キャンパス・イ ノベーションセンター東京 国際会議室(1F), 2007年 9月6日(木), 「JAIST-COE/AIST-CVS シンポジウム ：形式検証技術 現状と安心電子社会への適用」発表 資料





定理証明によるファイアウォール ルサーバの検証

2007.9.6

北陸先端科学技術大学院大学

矢竹健朗

k-yatake@jaist.ac.jp



形式検証の必要性

- 情報システムの社会インフラ化。
 - システムの欠陥が社会に甚大な被害をもたらす。
→ システムの正しさを保証することが必要
- 問題点：システム検証はテスト主導。
 - 入力データは一般に無限。
 - 100%のカバレッジを実現することは不可能。
→ 厳密な数学理論に基づく網羅的な検証が必要。



定理証明によるシステム検証

■ 定理証明

- 最近、産業界でも注目されつつある網羅的検証技術の一つ。
- データに関する網羅的な検証が可能。
 - 「任意の n について $1+2+\dots+n = n*(n+1)/2$ 」
 - 「任意の入力データについてシステムが正しく動作する」
- 定理証明器: 証明の計算機支援

手計算による証明



0からnまでの和を求める関数の定義

$$(\text{Sum}(0) = 0) \wedge$$

$$(\text{Sum}(n+1) = n + 1 + \text{Sum}(n))$$

「 $\text{Sum}(n) = n \cdot (n+1)/2$ 」の証明

(証明)

nに関する帰納法を適用する。

(1) $n=0$ のとき

$$(\text{左辺}) = \text{Sum}(0) = 0$$

$$(\text{右辺}) = 0 \cdot (0+1)/2 = 0$$

(2) n のとき成り立つと仮定

$n+1$ のとき

$$(\text{左辺}) = \text{Sum}(n+1)$$

$$= n+1 + \text{Sum}(n)$$

$$= n+1 + n \cdot (n+1)/2$$

nの偶奇で場合分け

(2-1) $n=2m$ のとき

$$(\text{左辺}) = 2m+1 + 2m \cdot (2m+1)/2$$

$$= 2m+1 + m \cdot (2m+1)$$

$$= (2m+1)(m+1)$$

$$(\text{右辺}) = (n+1) \cdot (n+2)/2$$

$$= (2m+1) \cdot (2m+2)/2$$

$$= (2m+1)(m+1)$$

(2-2) $n=2m+1$ のとき

$$(\text{左辺}) = 2m+2 + (2m+1) \cdot (2m+2)/2$$

$$= 2(m+1) + (2m+1)(m+1)$$

$$= (m+1)(2m+3)$$

$$(\text{右辺}) = (n+1) \cdot (n+2)/2$$

$$= (2m+2) \cdot (2m+3)/2$$

$$= (m+1)(2m+3) \quad (\text{証明終})$$

定理証明器による証明



```
- Define `(Sum(0) = 0) ∧
      (Sum(n+1) = n + 1 + Sum n)`;
(* Sumの定義 *)

- g `!n. Sum n = n * (n + 1) / 2`;
(* ゴールの設定 *)
> Initial goal:
  !n. Sum n = n * (n + 1) / 2

- e (Induct_on `n`);
(* nに関する帰納法の適用 *)
> OK..
2 subgoals:
Sum (n+1) = (n+1) * (n+1+1) / 2
-----
Sum n = n * (n + 1) / 2

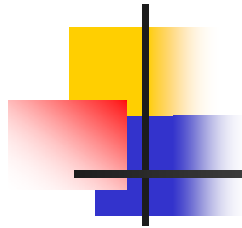
Sum 0 = 0 * (0 + 1) / 2
```

```
- e (RW_TAC arith_ss [Sum]);
(* Sumの定義による書き換え *)
> OK..
Goal proved.
|- Sum 0 = 0 * (0 + 1) / 2

Remaining subgoals:
Sum (n+1) = (n+1) * (n+1+1) / 2
-----
Sum n = n * (n + 1) / 2

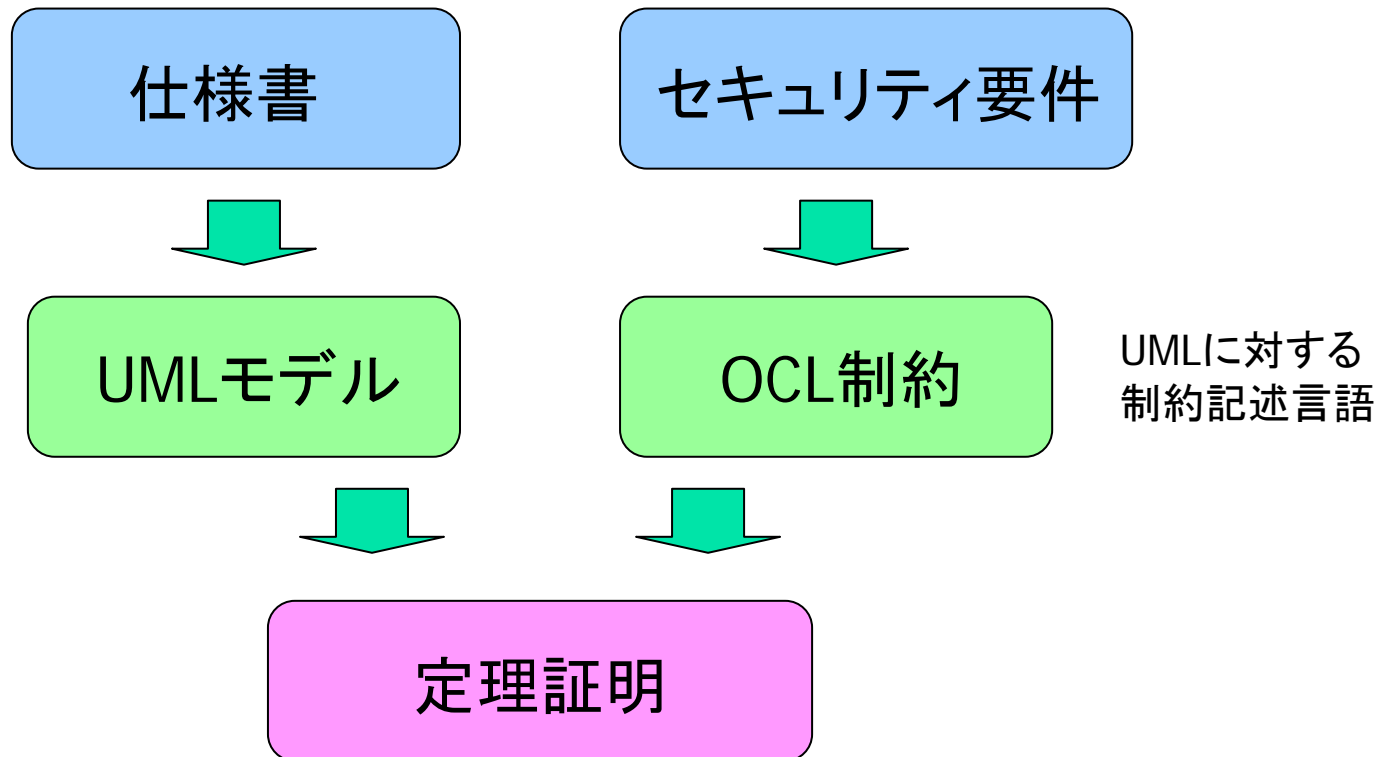
- e (RW_TAC arith_ss [Sum]);
> OK..
1 subgoal:
n + 1 + n * (n + 1) / 2 = (n + 1) * (n + 2) / 2
-----
Sum n = n * (n + 1) / 2

- ...
```

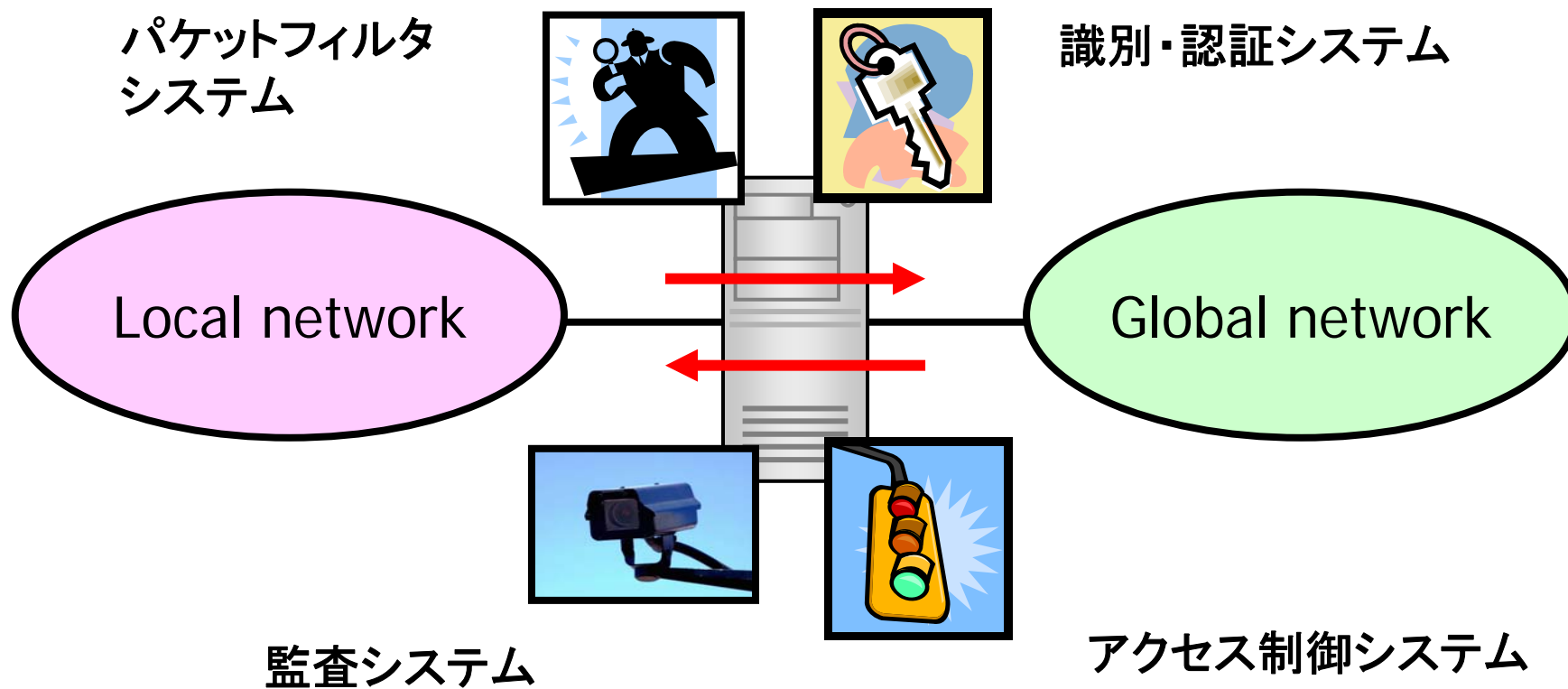


ファイアウォールの検証

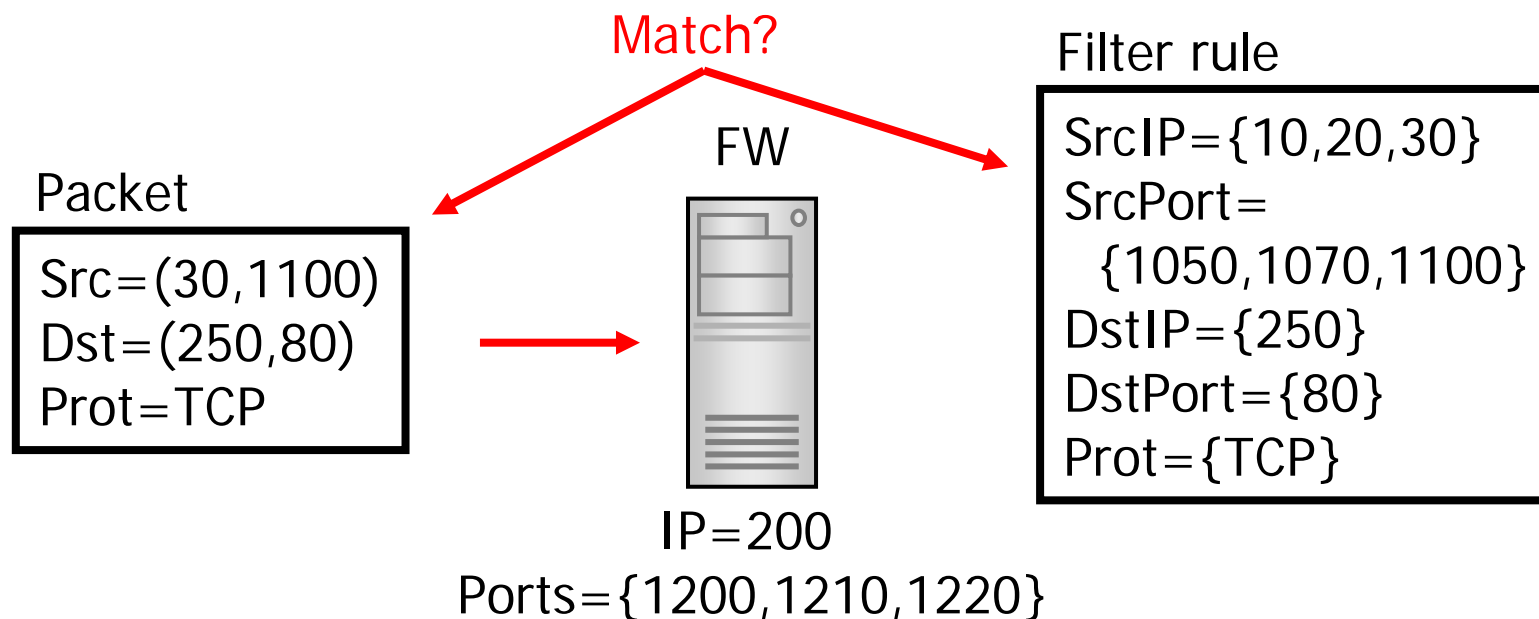
CISCO PIX Firewall
A4 5枚程度



ファイアウォールの仕様



フィルタルール照合



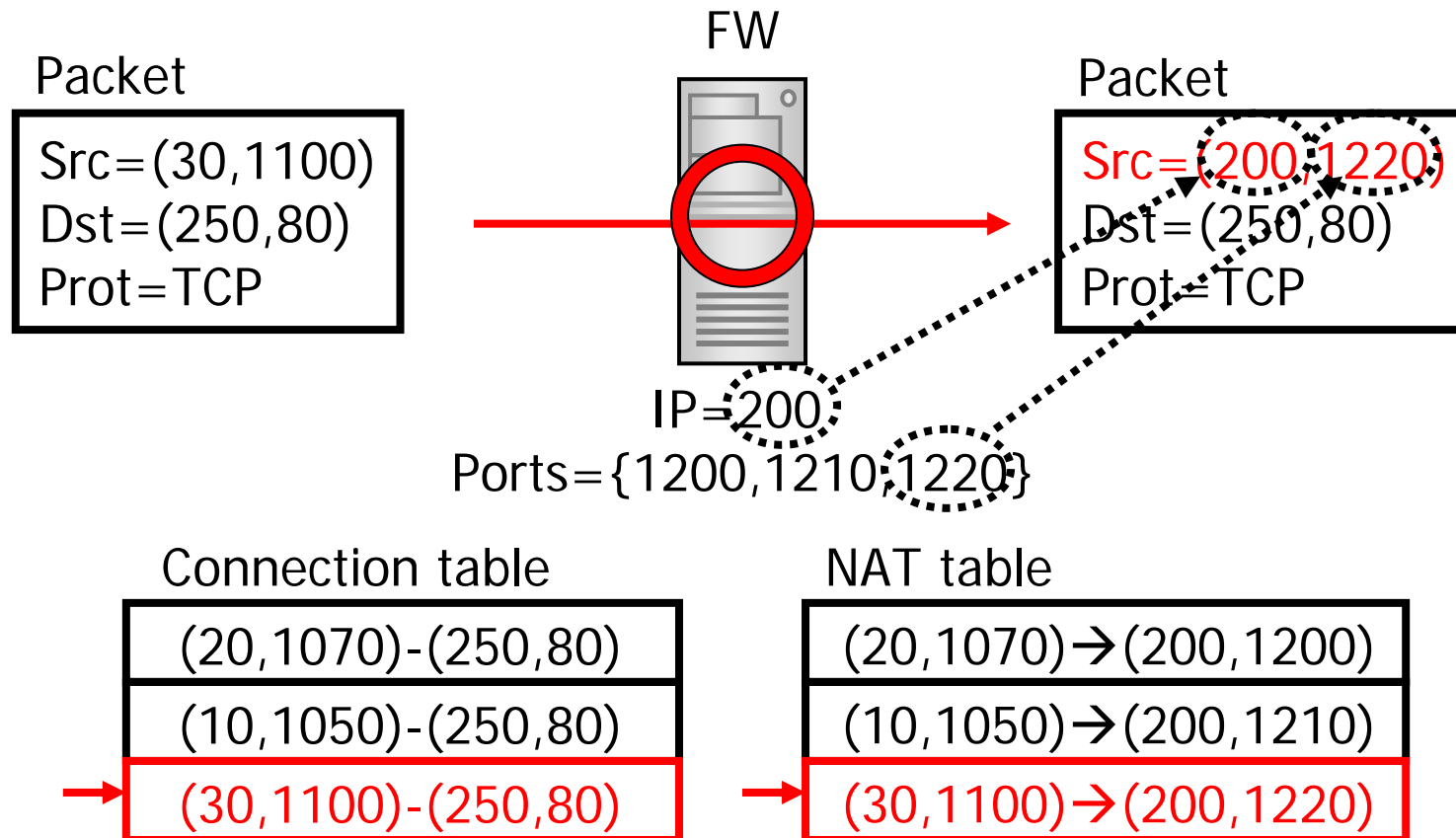
Connection table

(20,1070)-(250,80)
(10,1050)-(250,80)
Emp

NAT table

(20,1070)→(200,1200)
(10,1050)→(200,1210)
Emp

NAT(ネットワークアドレス変換)

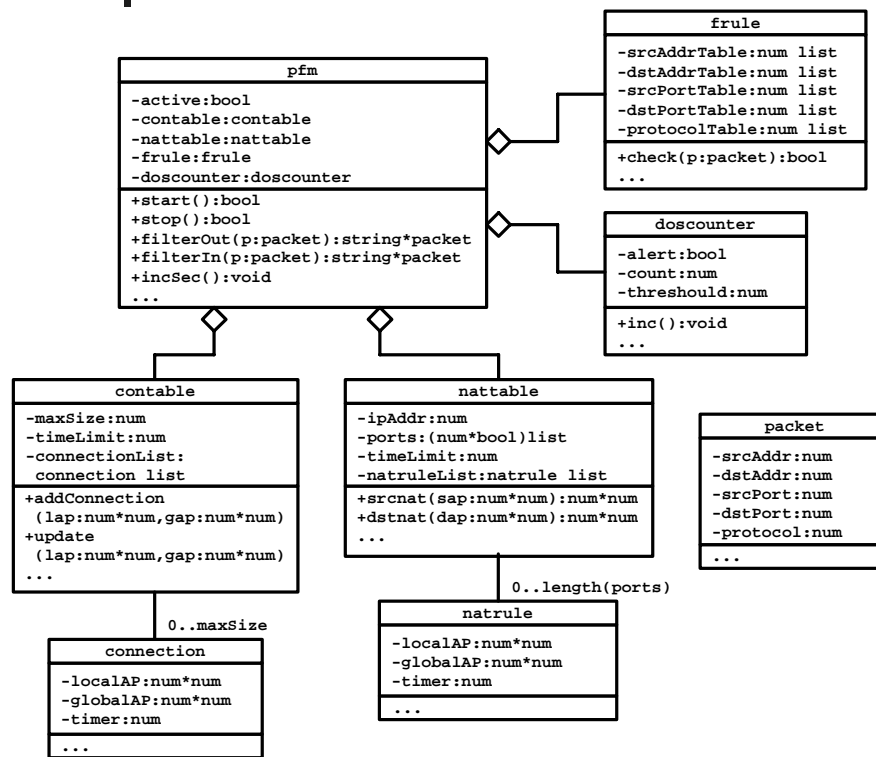




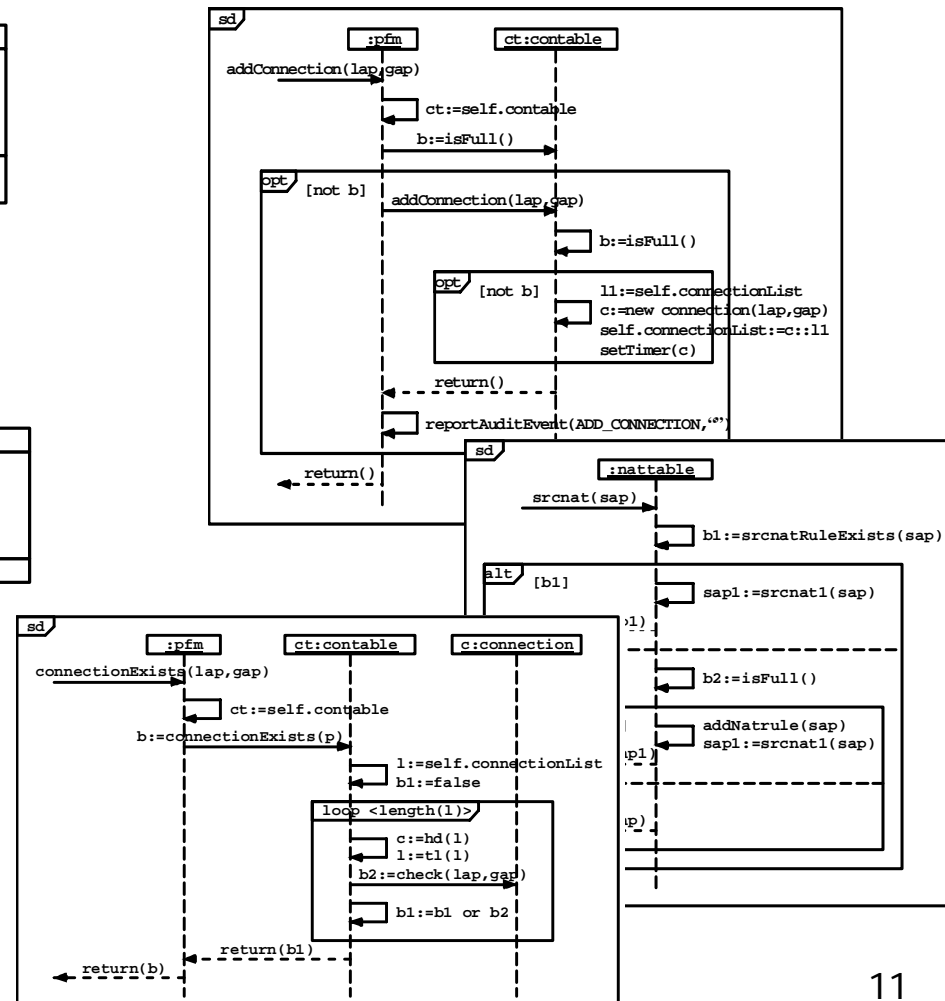
セキュリティ要件

- フィルタルール照合の正当性
 - 新規のアウトバウンドパケットはフィルタルールを満たさない場合、必ず廃棄される。
- アドレス変換の正当性
 - パケットが外部ネットワークに送出されるとき、送信元IPアドレスが必ずFWの公開アドレスに書き換えられる。

UMLによるモデル化



クラス図: 5枚
シーケンス図: 27枚





UMLによるモデル化

	クラス	属性	メソッド	API
パケットフィルタ	8	35	102	18
識別・認証	4	20	54	23
監査	4	13	37	10
アクセス制御	1	4	8	2
サブシステム統合部	2	10	66	50
ファイアウォール	19	82	267	50



OCLセキュリティ要件

フィルタルール照合の正当性

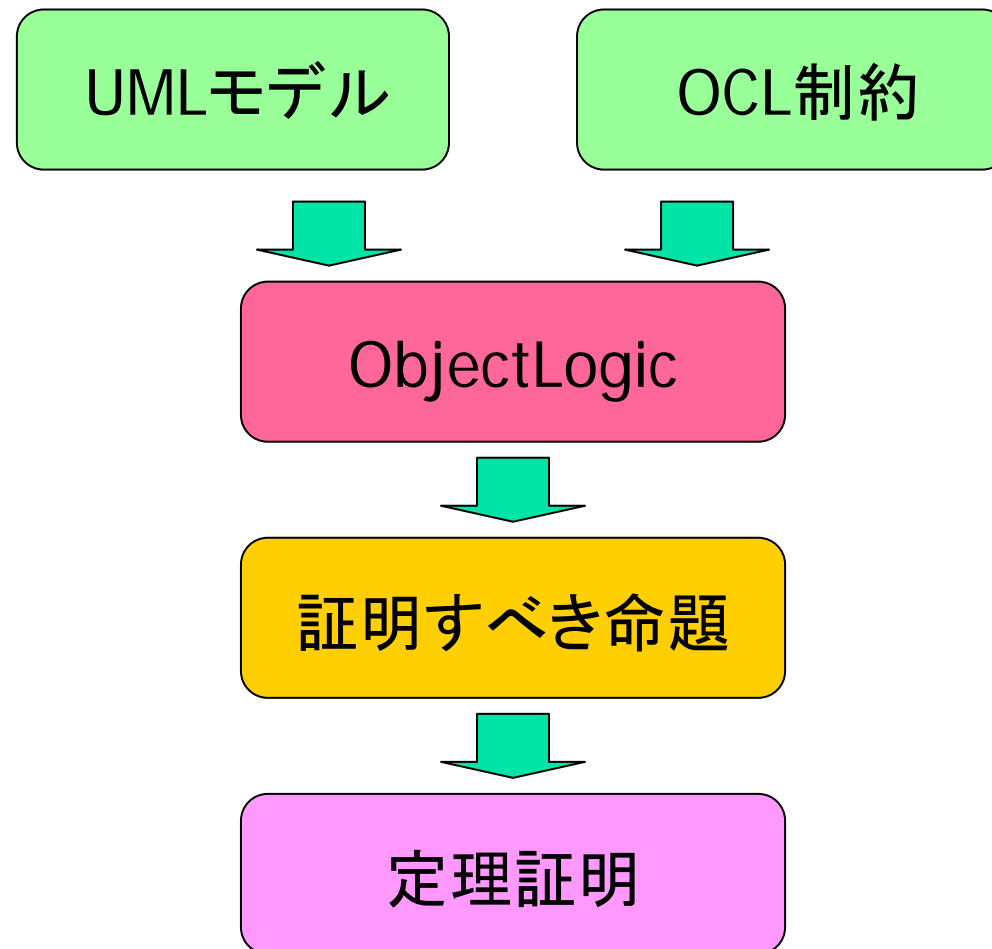
```
pfm::filterOut(p:packet):packet  
pre: not (isValidPacket(p))  
post: result=null
```

アドレス変換の正当性

```
pfm::filterOut(p:packet):packet  
post: not (result=null) implies  
      (result.srcAddr=pfm.getIpAddr())
```



UMLモデルの検証





定理証明

フィルタルール照合の正当性

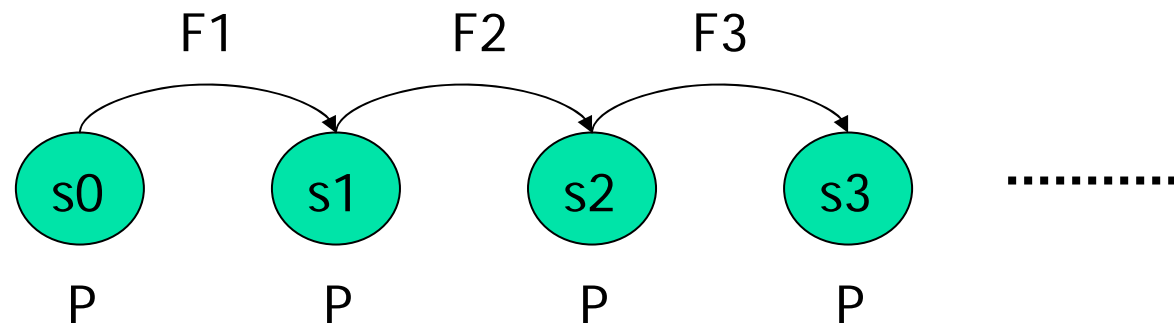
```
| - ∀ pfm p s.  
  let (p',s') = pfm_filterOut pfm p s in  
    packet_ex p s ⇒  
    ¬(pfm_isValidPacket pfm p s) ⇒ (p'=packet_null)
```

アドレス変換の正当性

```
| - ∀ pfm p s.  
  let (p',s') = pfm_filterOut pfm p s in  
    Inv pfm s ∧ ¬(p'=packet_null) ⇒  
    (packet_get_srcIpAddr p' s' = pfm_getIpAddr pfm s)
```


定理証明の有効性

- 網羅性。
 - データ、パス
- 不変表明の発見によるシステム内部制約の発見。
 - 不変表明: システムの実行中、常に成立している性質。
 - 定理の前提条件として必要になることが多い。
 - テストでは発見しにくい。



不変表明の例

- 接続表とアドレス変換表の一貫性。
 - 接続が存在するならば、その内部アドレスに対応するアドレス変換規則が必ず存在する。

接続表

(20,1070)-(250,80), 20
(10,1050)-(250,80), 30
(30,1100)-(250,80), 35

.....→

.....→

.....→

アドレス変換表

(20,1070)→(200,1200), 30
(10,1050)→(200,1210), 40
(30,1100)→(200,1220), 45

内部制約の発見

接続

(20,1070)-(250,80), 40



(20,1070)-(250,80), 20



(20,1070)-(250,80), 0

20 sec

20 sec

10 sec

アドレス変換規則

(20,1070)→(200,1200), 50



(20,1070)→(200,1200), 30

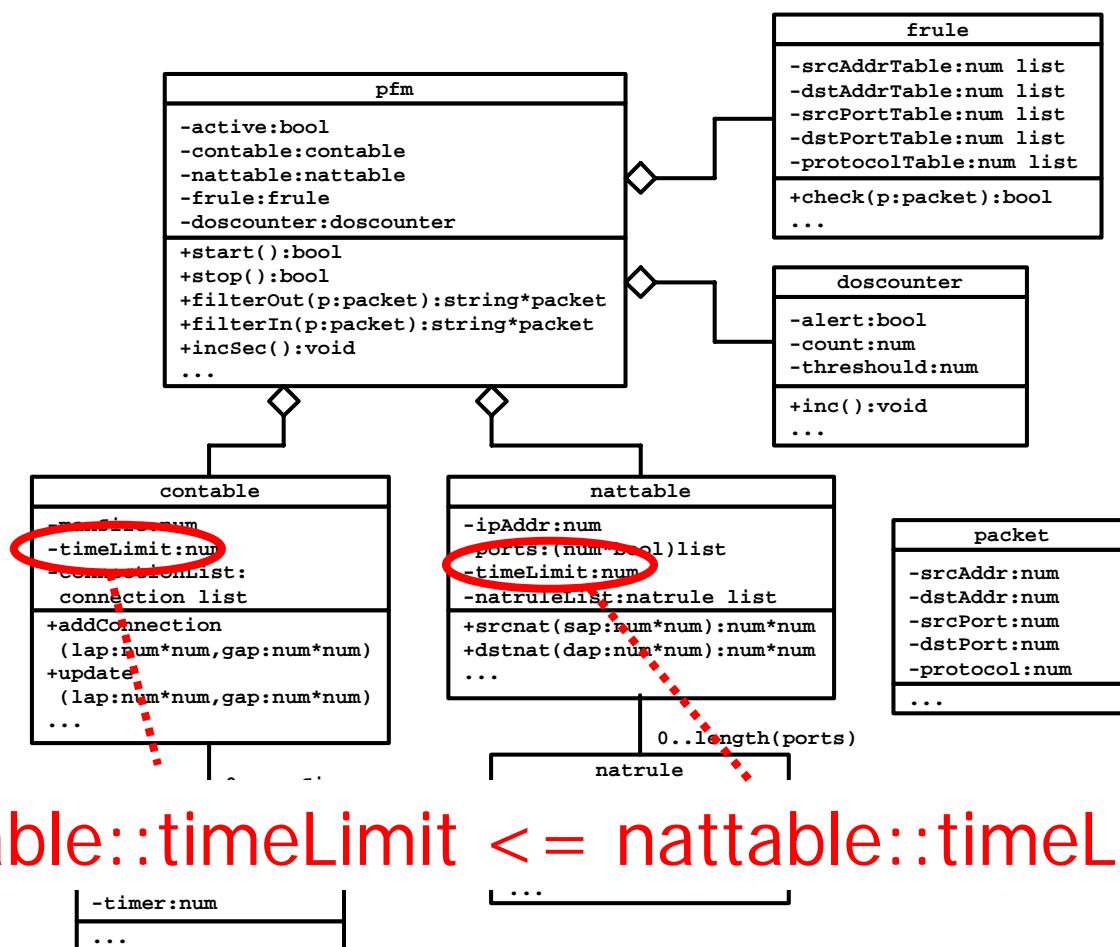


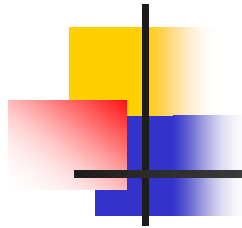
(20,1070)→(200,1200), 10



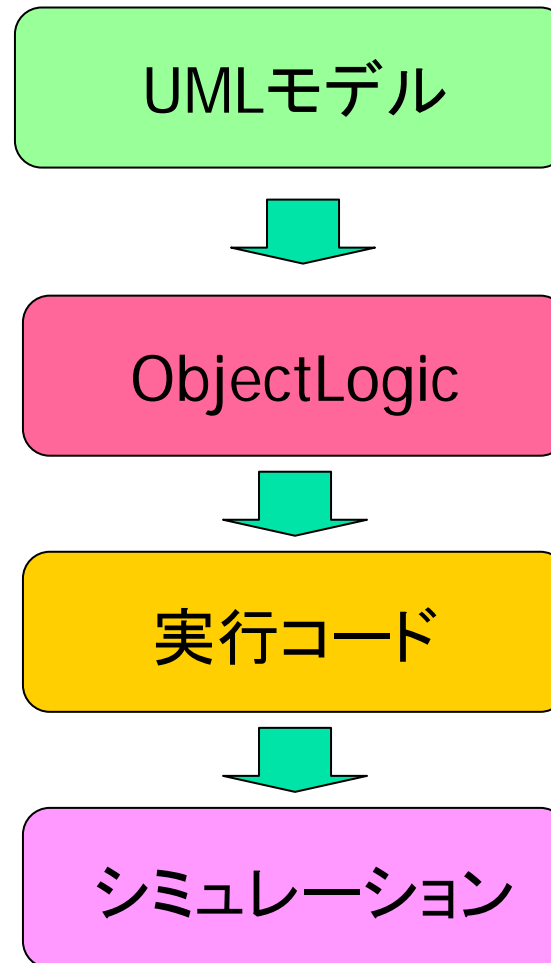
(20,1070)→(200,1200), 0

内部制約の発見





シミュレーション





シミュレーションの有効性

- 簡単な誤りの発見。
 - 明らかに許可されるべきパケットが廃棄。
→ if文のthenとelseの処理が逆。
 - 新規パケットを送信したのに接続表が変化していない。
→ メソッド呼び忘れ。
- 高コストの定理証明の前に予め簡単な誤りを除去しておく。
→ 検証プロセス全体としてコストを削減。

シミュレーションの様子

- val (pfm,s) = new_pfm store_emp;	パケットフィルタの生成
...		
- val (_,s) = pfm_setIpAddr pfm 200 s;		
- val (_,s) = pfm_setPorts pfm [1200,1210,1220] s;	}	コンフィギュレーションの設定
...		
- val (_,s) = pfm_setFilterRules pfm SA [10,20,30] s;		
- val (_,s) = pfm_setFilterRules pfm SP [1050,1070,1100] s;	}	フィルタルールの設定
...		
- val (b,s) = pfm_start pfm s;	パケットフィルタの起動
...		
- val (p,s) = new_packet 20 1070 250 80 TCP s;	パケットの生成
...		
- val (msg,p,s) = pfm_filterOut pfm p s;	アウトバウンドフィルタの適用(許可)
> msg = "pass: new connection" : string		
...		
- pfm_getConnections pfm s;		
> val it = [((20,1070),(250,80),300)] : ((int*int)*(int*int)*int) list		
- pfm_getNatrules pfm s;		
> val it = [((20,1070),(200,1200),500)] : ((int*int)*(int*int)*int) list	}	パケットフィルタ、 パケットの状態の表示
- packet_getInfo p s;		
> val it = ((20,1200),(250,80),0) : (int*int)*(int*int)*int		
- val (p,s) = new_packet 20 1070 250 53 TCP s;	パケットの生成
...		
- val (msg,p,s) = pfm_filterOut pfm p s;	アウトバウンドフィルタの適用(廃棄)
> msg = "drop: rule not match" : string		
...		



まとめ

- 定理証明による実用的なファイアウォールサーバの検証。
 - ファイアウォールの仕様書、セキュリティ要件を、UMLモデルとOCL制約に直し、それが正しいことを定理証明により検証した。
- 定理証明の有効性
 - データ、パスに関する網羅性。
 - 不変表明の発見による内部制約の発見。